

平成20年3月28日
内閣府（防災担当）

内閣府（防災担当）
「防災担当職員のための手引き作成及び災害応急対策期における
訓練手法開発のための検討会」（第3回）
議事概要

1. 検討会の概要

日時：平成20年2月26日（月） 18:00～20:00

場所：中央合同庁舎5号館3階 特別会議室

2. 議事概要

能登半島地震及び中越沖地震の「手引き－アフターアクションレポート」の構成案等について、事務局より説明を行った後、各委員にご議論いただいた。

<主な意見>

- 新たに着任する担当の人間に、能登半島地震及び中越沖地震時に、どういう事実があったか、どういう問題認識があったか、何がどう改善されたかについての関連が記述されているレポートとなるのがよい。
- アフターアクションレポートの本文にクロノロジーが含まれている方がよい。時系列の流れで、いつどのようなことをしたということが示されていると、読む人間が理解しやすい。
- 基本的な地図を、本文に加えた方がよい。震源の位置や被災の広がりなども含め、土地勘がわかるようなものを加えるべき。レポート上で記述として出てくる地名がわかるようなものがよい。
- 取組の考え方、方針、狙い、支援活動は何のためにやるかなどについて、どこかで記述、整理してあるほうがよいのではないか。
- アフターアクションレポートの位置づけは、応急担当のレポートとして位置づけでよいのではないか。今後、応急対策担当以外の課題、改善方策を防災担当全体で付加してもらうことも一案かもしれない。
- 資料編には、総理の文言、省庁連絡会議の議題や議事録、会議後のブリーフィング資料などもあっていい。他の地方自治体の活動なども資料として扱ってしまっ

てもいいのではないか。

- レポートは、問題のなかったところや上手くいったところは、現物を置いておけばよい。実際に行われた総理指示の資料や広報資料など、そのものを資料に残しておけばよい。そこにコメントがなければそれが、ひな型となる。改善のあるものについては、特出ししておけばよい。
- 総理の発言や省庁連絡会議の実施において、対応がしっかり出来たものは、今後のテンプレートとして使える。
- 着任早々の担当に、このレポートの読み方を覚えてもらうこと自体が、実は災害対応に慣れてもらうということに繋がると良い。災害対応のフレームワーク、ミッション、業務の関係が繋がっていると解り易い。
- 国・県・市の現場における状況認識の統一という場は、必ずどこかに必要である。その場所がどこに必要かという意味では、災害の規模にもよるところが大きい。
- 応急対策担当のミッションを遂行するため、政府調査団、現地、とりまとめ報が武器となる。首相の発言がしっかり出来、国がいい方向を出せる事が重要で、頼れる人から情報を得る、現地での調整、現地での要望のコーディネーションがなければならない。
- 政府現地連絡対策室の配置について、機能的に考えると、インシデントコマンドポストの役割を担うべきで、全体が見渡せて、かつ、自らが安全であるところに位置するほうがよい。